

研究機関名	研究課題	概要	研究期間
水産総合研究センター	印旛沼におけるヨシ・ガマ帯の魚類再生産に関わる機能の解明	内水面水産資源の維持・増大を図るため、印旛沼に自生する抽水植物帯の魚類再生産における機能を解明する調査を行い、抽水植物（ガマ）帯がモツゴ稚仔魚の保育場やテナガエビの育成場となっていることを明らかにした。	22年度～26年度
	湖沼河川の魚介類資源動態の把握	主要河川湖沼の魚種組成の変化及び有用魚介類の分布実態を調査して環境変化に伴う経時的変化を把握することを目的としており、印旛沼・手賀沼の魚介類相及び有用魚介類の生息状況を把握した。	S50年度～31年度
	希少種保護増殖技術の開発	ミヤコタナゴの継代飼育による系統群の保存とインガイ科二枚貝の増殖技術開発により自然繁殖を可能とし、安定的に存続できる状態にすることを目的としている。26年度は、本県産ミヤコタナゴ3系統群の存続を図り、インガイ科二枚貝の飼料試験を実施した。	3年度～28年度

## キ 中央博物館

研究機関名	研究課題	概要	研究期間
千葉県立中央博物館	重点研究：房総丘陵の自然一過去、現在、未来一（植物学）	維管束植物相については、東京大学千葉演習林については24年度に本調査を終了し、25年度から補足調査を行っている。銚子市域ほぼ全域のメッシュマップに基づいた調査は終了し7105点の標本を得た。蘚苔類相については、東京大学千葉演習林に保管されている清澄山産の標本を検討し、いくつかの特記すべき種を見出した。地衣類相については、東京大学千葉演習林内で調査を実施し、約800点の標本を採取した。また、これまでに得られた標本についても検討した結果、国内や県内でほとんど記録のなかった種を確認した。菌類相に関しては、東京大学千葉演習林内でこれまで得られた標本類を整理し、大型菌類目録の作製作業を進めた。	24年度～継続中
	重点研究：房総丘陵の自然一過去、現在、未来一（動物学）	26年度には合計9回、延べ18日の調査を実施した。標本の整理同定を進めた結果、新たに21種の千葉県初記録種を追加し、本研究による千葉県初記録種は通算38種となった。	24年度～継続中
	重点研究：房総丘陵の自然一過去、現在、未来一（地学）	嶺岡帯に接する房総丘陵南端部の地質調査を範囲を広げて継続し、数多くのテフラ鍵層を確認した。小櫃川支流武田川沿い（木更津市馬来田地区）の地形、湧水、下総層群の貝化石模式地などの調査を行い、流域の地形分類図を作成した。また夷隅川中流大多喜周辺の地形調査を行い、城下町の地形や水との関わりについて考察した。上総層群万田野層を重点的に調査し、多数の脊椎動物化石・無脊椎動物化石を採集するとともに、産出層準の地質を検討した。また、海岸部では上総層群や完新統の化石を収集し、一部については放射年代測定を行った。	24年度～継続中
	地域研究：房総半島の地層の堆積環境の復元	屏風ヶ浦の上部を構成する更新統香取層の堆積相解析をおこなった。また、テフラを採取し、その年代を検討中である。	22年度～継続中
	地域研究：房総半島嶺岡帯の地質構造の解明	嶺岡帯内で発見された新鉱物「千葉石」の成因を探索する目的で、嶺岡帯南部の保田層群分布域を調査し、千葉石は見いだされなかったものの、玉髓などの石英質の脈を数地点で確認し、産状の記録と資料の収集を行った。	18年度～継続中
	地域研究：房総半島の地形景観とその成り立ちに関する研究	屏風ヶ浦海食崖全域を近接撮影した斜め写真を基に、海食崖を構成する微地形や地層、鍵層などを系統的に把握し、約20枚の景観図を作成した。また約30年前に同じ地域を撮影した斜め写真と比較し、消波堤設置以降の海食崖の地形変化について考察した。	25年度～
	地域研究：房総半島の脊椎動物化石の分布調査	上総層群梅ヶ瀬層（市原市）と上総層群万田野層（市原市）の脊椎動物化石調査を行い、多数の陸生及び海生ほ乳類の化石を採集した。その一部は、国立科学博物館と筑波大学との共同研究の対象として、研究を進めている。	18年度～継続中
	地域研究：木下層群クジラ化石とその古環境	クジラ化石発掘現場で追加調査を行うとともに、未整理資料の整理・検討を行った。	18年度～継続中
	地域研究：房総周辺の花弁・環境誌	第四紀系の論文雑誌にかかる文献調査をおこなった。	18年度～継続中
	地域研究：房総丘陵におけるタゴガエルの産卵場所に関する環境地質学的研究	館山丘陵や君津市清和県民の森で新たなタゴガエルの産卵場所を発見し、地質学的記載を行った。	18年度～継続中
	地域研究：房総丘陵における河川の発達と河道の変遷に関する研究	小櫃川上流域の踏査、古地図、迅速図、過去の地形図等による解析、古文書の解析を行った。	18年度～継続中
	地域研究：千葉県の甲虫相に関する研究	君津市高宕山周辺、鴨川市元清澄山周辺で調査を行い、千葉県の甲虫相を明らかにするための基礎資料を収集した。また、引き続き千葉県動物誌、千葉県産動物総目録に掲載されていない甲虫について文献調査を行い、補遺と追加として48種を報告した。	18年度～継続中
	地域研究：房総のハチ類誌	千葉県内において、ハチ類の採集を行った。標本作製および同定を行っている。	18年度～継続中
	地域研究：房総の貝類誌	今年度も、県内各地で化石・貝塚・現生の貝類調査を行い、約150点の標本を収集した。成果は、佐倉市の縄文時代早期の間野台貝塚や袖ヶ浦市の水神下遺跡の近世貝層の報告を行った。	18年度～継続中
	地域研究：房総の魚類誌	魚類環境DNA用ユニバーサルプライマーの開発に成功し、次世代シーケンサを用いた環境水分分析法を確立することができた。予備調査として館山湾から得られた環境水を8サンプル分析したところ、計14種の魚類を検出することができた。また、市民研究員と共に県内魚類の収集に努め、計120個体以上の魚類を収蔵資料に追加した。	18年度～継続中
地域研究：房総の甲殻類誌	東京湾の盤洲干潟で採集された標本に基づき、カクレガニ科の新種バンズマメガニを記載・報告した。南房総で海綿共生性甲殻類、内在性甲殻類相の調査を継続し、資料の収集を行った。さらに、房総半島の沖合いに位置する伊豆大島においてダイビングにより採取された標本を収集し、種同定、登録を進めた。	18年度～継続中	

研究機関名	研究課題	概要	研究期間
千葉県立中央博物館	地域研究：房総丘陵の昆虫・クモ類相	三島小教室博物館周辺、高宕山周辺地域で調査を行い、約50種80点以上の標本を作成した。調査の成果はH27年度にリストとして公表の予定。	18年度～継続中
	地域研究：房総丘陵の両生爬虫類相	養老溪谷、君津市清和県民の森、館山丘陵にて両生爬虫類の生息調査を行い、生態写真も撮影し、ウェブサイトなどで公開した。	18年度～継続中
	地域研究：千葉県鳥類相に関する研究	千葉県を中心とした文献を収集した。海岸部、および利根川流域の鳥類相の現地調査を行った。	18年度～継続中
	地域研究：房総のイシサンゴ類誌	沖縄県宮古島市近海の八重干瀬において、有藻性イシサンゴ類の分布調査を行い、約200点の標本および水中写真を収集した。また、日本をタイプ産地とする無藻性イシサンゴ類のタイプ標本関連情報をとりまとめ、共同研究者と共著で日本古生物学会誌に投稿した。	22年度～継続中
	地域研究：房総の維管束植物誌	ヤドリギ類の分布調査を行い、県内の分布図を作成した。また、寄主リストを作成し、ヤドリギ類の生態を解明した。	24年度～継続中
	地域研究：房総丘陵の維管束植物相	銚子市の種子植物標本をほぼ全域に渡って採集し終わり、現在取りまとめを行っている。ほぼデータベース化が終わり、標本作製・配架も終了し、全体像を把握するために取りまとめている。	18年度～継続中
	地域研究：房総の蘚苔類誌	市民研究員と共同して鎌ヶ谷市、野田市、長生村のコケ植物を調べた。また、Bakalin博士と共同研究を行い新種記載したヤマツボミゴケのパラタイプとして鋸山産の標本を指定した。	18年度～継続中
	地域研究：房総の地衣類誌	市民研究員・共同研究員と協力し、君津市等において調査を行い標本を収集するとともに、これまで収集した標本について同定・分類学的検討を進めた。その結果、日本新産のチャシゴケ属の一種等について論文を準備中。	18年度～継続中
	地域研究：千葉県大型海産藻類の分類・生態に関する研究	銚子地域及び館山地域において、特に紅藻サンゴモ科及びテングサ科の分類学的及び生態学的な調査研究、標本収集をおこなった。また、褐藻アナメ属オオアナメの生態学的な調査をおこなった。特に、褐藻ヒジキの民族藻類学的な調査をおこない、日本人は喪葬を象徴する海藻としてヒジキを用いたとする学術論文を公表した。	25年度～
	地域研究：生態園の生態系変遷に関する総合研究	生態園に生息するヒトスジマカの生息実態の解明に向けて（成虫が高密度で生息する空間、飛来する成虫の発生源について）予備的な調査を行った。	18年度～継続中
	地域研究：生態園の生態系変遷に関する野鳥調査	平成26年度（2014年4月～2015年3月）は、生態園一周ルートを歩く早朝野鳥調査（7：45～8：45）および野鳥観察舎から見える範囲で行う日中調査（8：45～16：15）を日曜日に全51日間に実施した。期間中に59種が観察され、全種の最大個体数合計は847羽であった。調査日の最大種数は48種、最大個体数は299羽であった。	18年度～継続中
	地域研究：千葉県における原生生物等の生息状況	農業用溜池など複数の水域における原生生物等の浮遊・付着生物の分布状況を把握した。	18年度～継続中
	地域研究：千葉県の水辺環境と水生昆虫類の分布特性	房総に分布するミサキツノトビケラについて形態・生態に関する論文が受理された。また房総丘陵に生息する絶滅危惧種ヒメボタルについて未知だった幼虫期の生態、特にその分散能力を研究した論文を公表した。	18年度～継続中
	地域研究：海岸植物の保護増殖	これまでの研究成果を総括し、総説として、景観生態誌に発表した。	18年度～継続中
	地域研究：房総に自生する植物のフェノロジー	昨年度に引き続き、千葉市と君津市において、常緑性と考えられる草本種を中心に、22種（うちシダ植物16種）について毎月1回程度の頻度で季節的な生長を調査し、そのフェノロジー型や個葉の寿命のデータを得た。	18年度～継続中
	地域研究：房総のヒメコマツの保全生態学的研究	房総のヒメコマツに関して、個体群モニタリング調査、繁殖状況調査、植栽試験モニタリング等を行った。また、本研究の成果を論文としてまとめ、植物分類学会誌「Bunrui」に発表した。	18年度～継続中
	地域研究：房総丘陵における人の生活と自然のかかわりに関する研究	木更津市中郷地区を中心に水の利用について調査をおこなった。雨がふれば洪水となる同地区にあっても、昭和30年代までは農耕に十分な水を確保することが困難であったこと、小櫃川の支流松川が重要な水の供給源であったことがわかった。	18年度～継続中
	地域研究：下総台地における近世以降の薪炭林育成に関する歴史地理学的研究	昨年度に続きテーマに関する聞き取り調査を行い、その結果を文章にまとめた。調査では、印西市域（旧印旛村）での、薪炭生産の状況、都市との燃料と肥料の交換などの情報が得られた。また水運に関する調査を行い写真資料に関する情報を得た。	18年度～継続中
	地域研究：房総半島における縄文時代の狩猟	現生のシカの骨格標本をもとに、貝塚から出土するシカの骨の部位と比較しながら、残存部位の比率から解体作業について調べた。また、狩猟としての落とし穴等の罠の遺跡における検出される立地条件等も調べた結果を、講演会等に活用した。	24年度～継続中
	房総半島の海洋生物相とその特徴：房総半島沿岸の魚類相と繁殖	県内調査では、地元漁業者等から寄せられた14種の魚類を標本として登録した。県外調査では、伊豆半島南部に位置する静岡県下田で魚類標本を収集した。現地漁業者の協力により、刺し網および定置網で漁獲された魚類の一部を収集し、約20種の魚類を標本として登録するとともに、薬品固定前にそれぞれ写真撮影を行った。	18年度～継続中
	房総半島の海洋生物相とその特徴：房総半島の海産無脊椎動物相	いすみ市・勝浦市・館山市・南房総市等において、潜水調査・磯採集・漁業混獲物調査等の方法で資料の収集を行い、標本資料約350点とこれらに関連した画像資料を収集した。	18年度～継続中
	房総半島の海洋生物相とその特徴：房総半島沿岸の海藻相	勝浦市沿岸を中心に海藻・海産種子植物相を調査して、海藻標本270点を新規登録した。勝浦新産種として紅藻ホウノオ、グンバイコノハを採集した。	18年度～継続中
	普遍研究：GPR（地中レーダー）を用いた河川州の研究	安倍川、矢作川など、粒径の異なる河川でGPR解析をおこなった。それにより河川の砂州の発達史をまとめた。	24年度～継続中
普遍研究：東北日本弧新第三紀火山活動の特質	群馬県南西部の下仁田地域において、鮮新世に形成されたカルデラ（本宿カルデラ）を構成する地層及び岩石の産状の調査を行い、資料を採集したのち、岩石薄片を作成して岩石の記載を行った。	18年度～継続中	
普遍研究：微小化石に基づく貝類化石の分類及び古生態の研究	白亜紀の銚子層群（銚子市）から、多数の微小貝類化石を発見し、その中に化学合成に依存したと考えられる異鰓類化石を確認した。この成果は、日本古生物学会において発表した。	24年度～継続中	
普遍研究：地質時代温暖期におけるアジアの古植生復元	銚子産植物化石の整理と解析を行った。	18年度～継続中	
普遍研究：日本産十脚甲殻類化石の古地理と古生態	各地の新生界から得られた十脚甲殻類化石について検討した。秋田県および北海道の鮮新統から新種のヒキガニ化石を報告し、これらが既知のベーリング海のオープニングと年代的に整合しない可能性があることを指摘した。	18年度～継続中	

研究機関名	研究課題	概要	研究期間
千葉県立中央博物館	普遍研究：日本列島周辺の花粉・環境誌	平成 23-25 年度にかけて実施した基盤研究 (C) (琵琶湖堆積物の花粉群解析による MIS 1、5e、11 間氷期の古気温定量復元) について 101 ページの成果報告書を作成した。	25 年度～
	普遍研究：河川地形の動態と生物分布に関する環境地質学的研究	東京都の秋川渓谷にてナガレタゴガエルの産卵場所を調査し、周囲の地質学的記載を行った。	18 年度～継続中
	普遍研究：地形や地質の生物分布に与える影響について	県内の植生図及び標高データ (5m メッシュ) に加え、2 次メッシュの衛星画像を GIS データベースとして整備し、解析を行った。	18 年度～継続中
	普遍研究：東アジアを中心とした地域の貝類相の変遷	これまでの沖縄での研究成果を、岩波書店の『文明の盛衰と環境変動』にまとめた。これまでほとんど知られていなかった日本の旧石器時代の貝類に関して沖縄での利用例と青森県下北半島での陸産貝類相の変遷も報告した。その他、日本各地の遺跡の報告を行った。調査による資料として約 350 点を収集した。	18 年度～継続中
	普遍研究：ミトコンドリアゲノム分析に基づく魚類の系統進化	カライワシ類の系統を新たに核ゲノムデータに基づき分析し、ミトゲノムに基づく結果を追認した。また、ヨウジウオ類やスズキ目の一部で新たなクレードを発見した。さらに、コイ目 (タナゴ科とコイ亜科) で新たな系統関係を明らかにした。年度末には過去 15 年間の成果をまとめた総説を出版した。	18 年度～継続中
	普遍研究：日本産イシサンゴ類の分類・生物地理に関する研究	沖縄県宮古島市近海の八重干瀬において、有藻性イシサンゴ類の分布調査を行い、約 200 点の標本および水中写真を収集した。また、日本をタイプ産地とする無藻性イシサンゴ類のタイプ標本関連情報をとりまとめ、共同研究者と共著で日本古生物学会誌に投稿した。	18 年度～継続中
	普遍研究：十脚甲殻類の分類	国内外で収集された十脚甲殻類標本資料の同定、整理を進め、新種の発見や分布記録の更新など、新規性の高い知見については論文文化を進めた。結果として、12 編の英文原著論文を国内外の査読付学術誌に投稿した。また、年度内に新たに公表された原著論文は 15 編で、2 新属 18 新種が公表された。	18 年度～継続中
	普遍研究：カミキリムシ科甲虫の分類	東南アジア産ルリカミキリ族の標本の収集を行い、標本、文献調査を行った。	22 年度～継続中
	普遍研究：アジア高山帯における植物分類学的研究	Flora of Nepal の Pedicularis (ゴマノハグサ科) の部分について、共同執筆し論文として公表される。東京大学に保管されている Nepal 産の標本 (主にアブラナ科) について、同定作業を進めた。	18 年度～継続中
	普遍研究：地衣類の多様性に関する研究	(1) 日本地衣類誌の一部として、日本産ウメノキゴケ科狭義ウメノキゴケ属についてまとめるとともに (間もなく投稿予定)、広義ムカデゴケ属について準備中。また、これに関連し、日本の地衣学に関する文献目録を作成した。(2) 淡水生地衣類の多様性解明として、野外調査を実施した。また、日本産岩上生および樹皮着生マルゴケ属、岩上生マンジュウゴケ属の分類を明らかにするとともに (それぞれ論文投稿中)、日本産淡水生被果地衣類の検索表を作成した (論文投稿中)。関連する分類群ならびに淡水生非被果地衣類として、日本新産のアオキノリ属の一種 (受理)、日本新産属のキツゴケ (受理)、コザラゴケ属の新種 (論文準備中) を認めた。また、以前の調査により得られた、鹿児島県産地衣類に関する新知見についてまとめた (投稿中)。(3) 東アジア産被果地衣類については、中国科学院昆明植物研究所に招聘され、雲南省周辺において野外調査を実施した。これによって、アジアから記録が無かったシズミゴケ属の 1 種を発見した (論文準備中)。	18 年度～継続中
	普遍研究：アジア太平洋地域におけるコケ植物の分類学的研究	日本産タイ類について Bakalin 博士と共同研究を行い、ツボミゴケ科の 1 新種ヤマトツボミゴケを記載し、ツツソロイゴケ科に 1 新組み合わせを行った。また、ハタケゴケ科について、共同研究を行い、日本新産として 3 種を報告した。	18 年度～継続中
	普遍研究：紅藻サンゴモ科およびカワノリ目の系統分類学的研究	国際共同研究として、極東アジア地域及び大洋州産カワノリ属 Prasiola (カワノリ目・トレボウクシア藻綱) の分子系統学的な研究をおこなった結果、日本列島に分布する海産種 3 種と淡水産種 1 種を分類学的に明らかにした。	25 年度～
	普遍研究：社会性ハチ類の生態・行動・進化に関する研究	フタモンアシナガバチ 5 令幼虫の人工給餌による飼育を行った。各種の餌料 (蜂の乾燥粉末、シルクパウダー、乾燥酵母、レバーパウダー) を用いて飼育を行ったが、良好な結果は未だ得られていない。	18 年度～継続中
	普遍研究：生物音声自動認識および環境モニタリングに関わる生物の音声信号と音環境構造の研究	東京大学大学院新領域創成科齋藤馨研究室と連携し、舟田池に設置したマイクによる音環境録音から得られる野鳥情報等について、ツイートによるデータベースの蓄積を試行した。	18 年度～継続中
	普遍研究：照葉樹林の生態学的研究	房総半島および奄美群島の照葉樹林において、樹木のサイズと着生植物の関係について調査を行った。	22 年度～継続中
	普遍研究：芽ばえに関する記載的研究	種子から育苗したり野外で採取した 57 種 (木本 26 種、草本 31 種) の芽ばえについて、形態記載をおこない、標本を作成した。うち 38 種は 26 年度にはじめて標本が得られた種類である。また、12 種は市民により育苗されたものである。	18 年度～継続中
	普遍研究：ススキ、オギ、アシ、ヒメガマの比較生態	オギとススキの種子を圃場にまいて、それぞれの発芽数、生存シュート数を 1 年間追跡調査を行った。	18 年度～継続中
	普遍研究：水辺植生の再生による水環境保全技術の開発	生態園舟田池で得られた知見を手賀沼・印旛沼での事業に活かした。また、井の頭池 (東京都武蔵野市) や皇居外苑濠 (東京都千代田区他) からの要請に応じ、同成果を基に両水域の水環境改善にも貢献した。	22 年度～継続中
	普遍研究：昆虫の遺伝子情報から分類と保全生態学を考える	絶滅危惧種シャープゲンゴロウモドキについて、次世代型シークエンサーをつかって大規模なゲノム情報を得ること。個体間の遺伝的な関係を推定するのに有効な遺伝子配列の推定を行った。	25 年度～
	普遍研究：シギ・チドリ類の越冬生態、特に個体数変動に関する研究	九十九里地域でオオソリハシシギの越冬期の生態に関して、調査を行い、越冬の記録を確認した。	18 年度～継続中
普遍研究：関東平野における明治 10 年代の土地利用に関する研究	迅速測図を基礎資料とする土地利用の把握の作業を継続している。茨城県北部の土地利用について、迅速測図に土地利用の着色作業を行ったうえ、2km・1km メッシュで卓越する土地利用を読みとり表にした。また 2km メッシュについては、含まれている全ての土地利用の項目を表にした。本年度までで、千葉県・茨城県の範囲が終了した。	21 年度～継続中	
普遍研究：持続可能な社会のための教育と博物館	これまで持続可能な社会を創り、支える人づくりを博物館が担えることを主張してきたが、今年度の研究の結果として、持続可能な社会づくりのための NGO をサポートし、育むことを博物館が担いうる可能性を見出した。これらの一部を学会発表などで報告した。	18 年度～継続中	

研究機関名	研究課題	概要	研究期間
千葉県立中央博物館	海博専門研究：房総半島における自然災害史の研究	一宮町に残る個人蔵文書の内容を分析し、延宝及び元禄地震津波の浸水域の復元を試みた。その成果は、一宮町公民館が主催する文化財講座において発表紹介した。	22年度～継続中
	海博専門研究：魚類の繁殖行動とその進化	奄美大島において、アマミホシラブリが海底に円形の産卵床をつくる様子や、産卵前に産卵床内につくる立体模様の形成過程を観察した。その結果、後者には一定の規則性のあることが明らかとなった。	24年度～継続中
	海博専門研究：日本産共生性コエビ類の分類学的研究	安房郡鋸南町地先において棘皮動物に共生するテゾルモゾルエビを採集した。本種の従来の北限記録は琉球列島だったため、本研究によって分布の北限を大幅に更新された。	18年度～継続中
	海博専門研究：イソギンチャク類の分類・生態学的研究	科学研究費の助成を受けて、スウェーデン王国のLund大学、Upsala大学の各博物館およびスウェーデン国立自然史博物館において、タイプ標本の調査を行った。また、本邦産のイソギンチャク類の模式産地である長崎県の五島にて標本採集を行ったほか、検討標本として伊勢湾菅島において標本の採集を行った。これらの標本は昨年度採集された標本と合わせて、DNA抽出、目的配列のPCRによる増幅を行い、配列決定の準備を行った。	18年度～継続中
	海博専門研究：原始紅藻珪藻植物の分類学的、生態学的研究	千葉県内数カ所でアマノリ属藻類を採集し、糸状体培養株を作出するとともに、北海道産のエリモアマノリと、類似種のウップルイノリとの分類学的検討を行い、8-10月におけるエリモアマノリとウップルイノリの葉状体の出現状況について調べ、両種における違いをより詳細に明らかにした。	18年度～継続中
	海博専門研究：ブナ林の動態と生物地理	東日本に本来は広く分布し、この地域の自然生態系の基盤をなしていたブナ林について、特に、1) 再生・維持動態、および2) 生物地理（生態地理および系統地理）について研究を進める。1) については、これまでに行ってきた研究を継続し、ブナ林の再生・維持動態を長期モニタリングデータに基づいて明らかにする。2) については、東日本各地の残存林の分布や植生学的特徴、DNA解析によるブナの系統地理学について研究を進める。	18年度～継続中

(5) 千葉地域公害防止計画

ア 計画の目標

区分		項目	目標
水質汚濁	(1) 健康項目	ア 水質(底質を含む)	<p>「ダイオキシン類による大気汚染、水質汚濁(水底の底質汚染を含む。)及び土壌汚染に係る環境基準について」 (平成11年12月27日環境庁告示第68号)第1の1に定める基準値</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水質(水底の底質を除く。)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>1年平均値が 1pg-TEQ/L 以下であること。</li> </ul> </li> <li>水底の底質 150pg-TEQ/g 以下であること。</li> </ul>
		イ 地下水	<p>「地下水の水質汚濁に係る環境基準について」 (平成9年3月13日環境庁告示第10号)第1に定める基準値</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カドミウム 0.003mg/L 以下</li> <li>全シアン 検出されないこと。</li> <li>鉛 0.01mg/L 以下</li> <li>六価クロム 0.05mg/L 以下</li> <li>砒素 0.01mg/L 以下</li> <li>総水銀 0.0005mg/L 以下</li> <li>アルキル水銀 検出されないこと。</li> <li>PCB 検出されないこと。</li> <li>ジクロロメタン 0.02mg/L 以下</li> <li>四塩化炭素 0.002mg/L 以下</li> <li>塩化ビニルモノマー 0.002mg/L 以下</li> <li>1,2-ジクロロエタン 0.004mg/L 以下</li> <li>1,1-ジクロロエチレン 0.1mg/L 以下</li> <li>1,2-ジクロロエチレン 0.04mg/L 以下</li> <li>1,1,1-トリクロロエタン 1mg/L 以下</li> <li>1,1,2-トリクロロエチレン 0.006mg/L 以下</li> <li>トリクロロエチレン 0.03mg/L 以下</li> <li>テトラクロロエチレン 0.01mg/L 以下</li> <li>1,3-ジクロロプロペン 0.002mg/L 以下</li> <li>チウラム 0.006mg/L 以下</li> <li>シマジン 0.003mg/L 以下</li> <li>チオベンカルブ 0.02mg/L 以下</li> <li>ベンゼン 0.01mg/L 以下</li> <li>セレン 0.01mg/L 以下</li> <li>硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素 10mg/L 以下</li> <li>ふっ素 0.8mg/L 以下</li> <li>ほう素 1mg/L 以下</li> <li>1,4-ジオキサン 0.05mg/L 以下</li> </ul>
	(2) 生活環境項目	ア 河川	<p>「水質汚濁に係る環境基準について」 (昭和46年12月28日環境庁告示第59号)第1の2の(1)に定める基準値</p> <p>ア 河川 生物化学的酸素要求量 A類型 2mg/L 以下 B類型 3mg/L 以下 C類型 5mg/L 以下</p>
		イ 湖沼	<p>イ 湖沼 化学的酸素要求量 A類型 3mg/L 以下 B類型 5mg/L 以下</p>
		ウ 海域	<p>ウ 海域 化学的酸素要求量 A類型 2mg/L 以下 B類型 3mg/L 以下 C類型 8mg/L 以下</p> <p>全窒素 全燐 II類型 0.3mg/L 以下 0.03mg/L 以下 III類型 0.6mg/L 以下 0.05mg/L 以下 IV類型 1mg/L 以下 0.09mg/L 以下</p>

イ 千葉地域公害防止対策事業計画に係る地方公共団体等の講ずる施策に要する経費

(23～27年度, 単位: 百万円)

事業名		計画期間内計画事業費	
公害防止対策事業等	下水道 (終末処理場等)	特定公共下水道	—
		都市下水路 (公害防除)	—
		終末処理場 (公共下水道)	39,721
		終末処理場 (流域下水道)	65,539
		小計	105,260
	しゅんせつ・ 導水等	河川しゅんせつ	2,336
		港湾しゅんせつ	—
		漁港しゅんせつ	—
		漁場しゅんせつ	—
		導水	—
		その他	—
		小計	2,336
	公害対策 土地改良	公害防除特別土地改良	—
		農業用水水質障害対策	—
		小計	—
	ダイオキシン類による土壌汚染対策		—
	計		107,596
特例負担 非適用事業	下水道 公共下水道等 (管渠)	130,667	
	計	130,667	
合計		238,263	